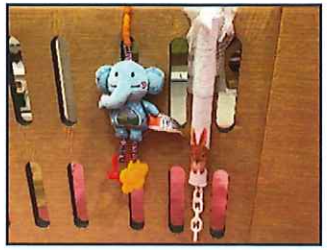
テーマ：様々な感覚を感じる　　０歳児　つぼみ組

## 活動①　　『これ、なあに？』



**活動テーマ**

・０歳児の発達（触れる・舐める・口に入れる・摘まむ・引っ張る・鳴らす）と共に、
子どもたち自らの育ちたいという気持ちや意欲から新たなモノとの出会いを一緒に問ながら関わっていく。

**活動内容**　　6～8月

・クラスの中で１番月齢の低い子ども、高い子どもを中心に環境を整えていく（６月現在　園児３名）
Ａさん（3か月）吊るし玩具の揺れを目で追ったり、手を伸ばしつかもうとする。
→寝返りを促すために、柵にも吊るし玩具を付け横向きになって手を伸ばしたくなる環境にする。
Ｂさん（１０か月）伝い歩きを楽しんでいる。トレインカースロープ等、目と手の協応ができるようになる。
→つかまり台に、本児の興味のある玩具を置き、歩きたい気持ちを引き出していく。
・夏のあそびも子どもの興味や食事の様子から、水だけではなく寒天あそびも取り入れる。
触る、つまむ、握る等手の様々な動きがあそびの中でできるようにしていった。

**子どもの姿からの気付き**

Ａさん：柵についているだけでは、興味をあまり持たず保育者の顔や声によく反応するため、
大人との関わりの中で身体を左右に動かすことや足を自由に動かす楽しさを感じている。鏡を見ることが好きなため、鏡付の玩具であそぶ。
Ｂさん：立つこと、伝い歩きをすること等、自分の視線の先に自由に行けることを楽しんでいる。
伝い歩きの距離を伸ばしていくために、少し先に玩具を置く等、子ども自ら歩きたくなる気持ちを引き出している。
Ｃさん：Ｂさんのあそびを見て、同じ玩具を手に取ろうとハイハイで移動するようになり、以前よりも活発にあそぶ姿が見られるようになった。
・夏のあそびでは、興味津々に関わる子どもと友だちの様子を見てからあそびに入る子どもと性格の違いも現われていた。慎重に触っていた子どもも回数を重ねるとダイナミックになったり、あそびの中でつまむことを経験し食へとつながる姿も見られた。

**振り返り（次回のテーマ、どんな環境設定をするか）**

・子どもの興味・関心と発達段階を考え、自ら育ちたいという気持ちが芽生えるような関わりと設定を常に考えている。担任間で子どもの様子を話し合い、玩具の見直しや入れ替えも行っている。
・保育者との愛着関係を築いていくことを基盤に、探索したくなる環境や手に取りたくなる玩具が子どもの目線の高さにあるのかも大切にしていった。
・今後、子どもの人数が増えていく中で一つの空間をどのように区切るのか。
発達月齢に合わせた保育をするための環境を整えていきたい。

テーマ：様々な感覚を感じる　　０歳児　つぼみ組

## 活動②　　『これ、なあに？』

活動内容

・９月　パーテーションを使用して部屋を分ける。環境を整えることによって子どもの遊びを保証する。

Ａさん（１歳３か月）友だちとの距離が近い時や一人あそびをしている時に友だちが近づくと泣いてしまう姿や遊べなくなってしまう事がある。

また、前室や玄関前など違う場所であそびたいと訴える。

→部屋を分けて少人数で遊べるようにして、Ａさんが安心して遊べるようにする。

Ｂさん（８か月）低月齢でずり這いをしている。歩いて行動する月齢の高い子どもと動きが違うため、

高月齢の本来舐めて遊ばない型落としなどの玩具を舐めてしまうことや、本児が踏まれてしまいそうな危険もあった。

→安全にずり這いできる環境を作っていく。

・１０月　テーブルを使用しての机上あそび

Ｃさん（１歳１か月）玩具などを摘まむことができる。

また、穴落としの玩具も〇の形を穴に落とすことができる。

→テーブルと椅子を用意し、手や指を動かし、型はめパズルのピースを摘まむ、入れるなどの微細運動を遊びながら促す。

子どもの姿からの気付き

９月

・Ａさん：パーテーションで部屋を区切ることで、少人数の子どもで遊ぶことが出来た。Ａさんは穴落としの玩具やチェーン落としなどの指先を使う玩具を集中して一人で遊ぶことが出来るようになり、Ａさんが安心して遊べるようになった。

・Ｂさん：　パーテーションで部屋を区切ることで、子どもの人数が分散された。ずり這いするスペースが増え、Ｂさんの安全を保障できるようになった。

また、ハイハイランド（クッション滑り台等）を設置し、Ｂさんが自らずり這いして行き、ハイハイランドに登ったり、全身を動かしたりしている。

１０月

・Ｃさん：椅子、テーブルを使用しての机上あそびをする。木の型はめパズルを指先でつまみ、型にはめようとする姿があった。時々、パズルが上手くはまらないと「キー！」と怒った声を出しているが、「（あ）った！」と話しながらパズルのピースを摘まんで保育者に見せていた。テーブルと椅子があることで集中して型はめパズルを楽しんでいた。

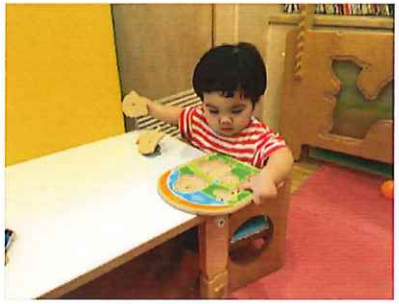
振り返り（次回のテーマ、どんな環境設定をするか）

９月　前回の振り返りから部屋の設定を変え、玩具の見直しや入れ替えを行った。
低月齢コーナーは、舐めたり口に入れたり出来る歯固め玩具や音の鳴る玩具、高月齢コーナーは、指先を使う穴落としやチェーン落としなどの玩具を設置した。
発達や月齢にあった玩具を用意し、パーテーションで部屋を区切ることで、子どもも大人も分かれて少人数での保育が出来た。一人遊びに集中したいＡさんと、ずり這いをしたいＢさんの遊びと安全の保障が出来るようになったと感じる。部屋の空間を分けることで、子どもが環境に飽きた時も気分転換できるように部屋を移動することが出来るようになった。

10 月　月齢の高い子どもが遊びの中で玩具を摘まみ、引っ張る姿を見て、集中して１対１で遊べるスペースを用意したいと思った。そこで室内にテーブルとイスを設置し様子を見る。（常時ではない）すると、Ｃさんが椅子に座り、テーブルで集中して型はめパズルを楽しむ姿を見ることが出来た。今後もパズルやボール落としなどの指先を使う机上あそびを提供していく。
子ども同士が近づきあって同じ遊びを楽しむ姿や同じ玩具に興味を示す姿があるので、円卓を使用してのおままごと遊びに繋げ、一緒にあそぶ楽しさが味わえるようにしていきたい。

9月

10月



## 活動③『これ、なあに？』

### 活動内容

・12月　見立てあそび(おままごと)のイメージがつくよう玩具の設定をする。
　　Ａさん(1歳６ヶ月)　設定された玩具に興味を示し、Ａさんを中心に興味が広がっていく。
・1月　　円卓、椅子を保育室に常設する。
　　机上あそびから、椅子に座り集中してあそび込むようになってきた。

### 子どもの姿からの気付き

12月　食事の際の、食具への興味から玩具のスプーン、皿をあそびに取り入れていく。
・Ａさん(1歳６ヶ月)玩具のスプーンを口に持っていき、食べる真似を始める。その姿を見て他児も真似てみようとする。
・Ｂさん(1歳５ヶ月)保育者がおままごとを一緒に楽しむ中お祈りをして食べる真似をする保育者を観察する。

1月　見立て遊びのイメージがつきやすいチェーンやキャップ、バンダナや人形を設定する。
・Ａさん(1歳７ヶ月)生活の中で見通しが持てるようになり、遊び方に変化が見られるようになってきた。保育者にバンダナを使って頭や腰に巻いてもらうと、おままごとでご飯を作り始める。(見立て)
　皿にチェーンをのせ円卓に並べ、おままごと棚に戻りスプーンを持ってテーブルにおく。生活の中で家庭や保育園での大人のことを良く見ていることが伝わってくる。
・Ｂさん(1歳６ヶ月)円卓に料理に見立てたお皿が並ぶと、手のひらを組み合わせお祈りする様子が見られる。

### 振り返り（次回のテーマ、どんな環境設定をするか）

初めのきっかけは保育者の環境設定からなるものであったが、子どもたちが日常の生活の中で見たもの、感じたこと、実際にやってきたことがあそびに関連付けられてくることがわかる。０歳児は「ごっこ遊びそのもの」ではなく、ごっこ遊びや見立て遊びにつながる土台づくりの時期であり、触る・握る・口に入れるなどを通して、物の感触や重さを感じ、お皿やスプーンなど身近な生活用具に興味を示す。これが感覚・探索の育ちに繋がっていく。そして、保育者が食べる真似をすると、じっと見つめ、それがスプーンを口に運ぶなど、簡単な動作を真似しようとする模倣が芽生えてくる。保育者が「おいしい」「いただきます」などの語りかけを繰り返し子どもに伝えることで、声や表情から意味を感じ取り、喃語や笑顔で反応することから言葉の育ちへと変化していく。おままごとあそびを通して、身近なものに触れ、保育者の関わりを感じながら「真似をする力」「人と関わる心地よさ」「言葉の土台」を育んでいることが感じられる。これらの経験を大切に、１歳児以降のごっこ遊びへと繋げていくことで友だちとあそぶことの楽しさ、おもしろさが感じられるようにしていきたい。